

## II 章

# 先進地視察結果



本事業では、指定校の教職員の防災教育に係る資質向上を図ることを目的に、岩手県及び宮城県の防災教育に力を入れている学校や地域の視察研修を行った。

## Ⅰ 令和3年度

日程 令和3年7月28日（水）～7月30日（金）

7月28日（水）

訪問先：宮城県伊具郡丸森町

### ① 丸森町の概要

宮城県の最南端に位置し、南西は福島県と隣接。町の北部を阿武隈川が貫流し、その流域に5つの支流河川が流れており、普段は穏やかな支流河川が全て町を中心部を通り阿武隈川に注ぎ込むようになっている。

### ② 令和元年東日本台風の被災状況

宮城県は、令和元年10月12日から台風19号の接近により昼過ぎから激しい雨になった。丸森町では、台風の通過に伴い12日夕方から13日未明にかけて局地的に猛烈な雨が降り続き、丸森町大内地区で612.0mmの雨が一晩で降った。町にある県管理河川18箇所が決壊し、町の様子を一変させた。



### ○いなか道の駅「やしまや」店主 八島 哲郎 氏

- ・10年に1回程度は水害に遭っているが、今までで最大の被害。
- ・川がL字になっているため、水が溜まり渦を巻いた。水面から25m水位が上がった。
- ・道の駅が復活できたポイント

「2つの“S”」「お客様からの支援」

昭和のS・・・お客様との対話を大事にしてきた商売

SNSのS・・・特に、Facebookが役立った。写真やメッセージで現状を発信できたため、遠くから支援に来てくれる方がいたり、不足している物を届けてくれた方がいた。



- ・今、自分がどこにいるのか確認し、慌てないこと。
- ・迷ったら避難する。
- ・「津波てんでんこ」・・・各自がてんでに逃げろ。  
自分の命は自分で守る。生きていれば必ず家族と会える。
- ・被災した時、助け合いが大事。共助がありがたかった。身をもって体験した。

### ○丸森町立丸森小学校 安全担当主幹教諭 横内 彰 氏

- ・土曜日に災害が発生し、2日後に通勤可能になった。保護者にメール配信し、電話連絡を要請した。被害状況や連絡先を聴き取り、連絡のつかない家庭には翌日から家庭訪問を行った。教職員2人1組で行い、5日後に児童全員の安否を確認した。
- ・最も困ったことは断水による飲料水とトイレの確保。
- ・体育館が使えず、グラウンドにも車両があったため、体育の授業ができない状況だった。
- ・避難所の人たちを励まそうとする気持ちが徐々に高まり、高学年を中心にダンスを披露したり、総合的な学習の時間で育てたお米でご飯を炊いて差入れを行った。
- ・児童への防災教育を通して、将来災害に遭った時に積極的に関わることができる人になってほしいと期待している。



○丸森町教育委員会 教育長 佐藤 純子 氏

- ・学校再開には、学習環境の整備、教科書や学用品の補充、学校移転に伴うスクールバスの準備、児童クラブの運営など多くの準備が必要だった。
- ・教職員が家庭訪問や避難所訪問を実施。児童生徒の被災状況を把握することや心のケアにも配慮した。教育委員会には詳細な状況の報告があり、膨大な対策に追われる日々だった。
- ・「子どもなりの心の整理」を支えたい。  
報告から決断したことは「早急に学校を再開しよう」ということ。傷ついた子どもたちの心は仲間での集団でこそ癒される。心の傷は、いつ現れるか分からないし個人差がある。専門的な知識だけではなく、愛情をもって立ち直る支援をしなければならない。
- ・警報等が出た場合、「学校防災要録」をつけている。学校防災指標を基に気象情報を点数化し、臨時休校等の緊急対応を判断している。
- ・防災主幹教諭を1名加配しており、防災教育が円滑に行われるようにしている。

- ・心のケアを第一に。
- ・万が一の場合に備え、安否確認の方法を決めておく必要がある。
- ・状況判断が難しい場合もあるが、保護者に引き渡すことが最善とは限らない。状況が急変する時のことも考えて慎重に行うべきである。
- ・危機管理マニュアルは、地域や学校の立地を見極めて作成する。全職員で共通理解する。

7月29日(木)

訪問先：宮城県石巻市 震災遺構大川小学校

### ① 東日本大震災大川小事故の概要

平成23年3月11日(金)14時46分、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の地震が発生。宮城県石巻市立大川小学校では、在校していた児童及び教職員が校庭へ避難。その後、高さ約8.6mの津波に襲われ、児童74名、教職員10名が犠牲となった。地震発生から津波到達まで約51分あったとされるが、高台に逃げるなどの避難をせずに津波到達の直前までグラウンドに待機していた。



### ② 訴訟判決の概要

大川小児童の遺族が市と県に損害賠償を求めた訴訟で、令和元年10月、最高裁において市・県の上告が棄却され、校長等や教育委員会による事前の防災対策に不備があったとして遺族側の勝訴が確定した。

### ○大川伝承の会 佐藤 敏郎 氏

- ・この場所は多くの命が津波で失われた場所である。でも、多くの方に向き合ってほしい場所。大好きな大川小学校を走り回る子どもたちをイメージしてみてください。目を凝らし、耳を澄ませば、見えてくる、聞こえてくる。
- ・事故当時、先生方も救いたかった命だった。だからこそ、私たちが事故と向き合って、これからの未来をどのように切り拓いていくのか考えなければならない。



- ・大地震が発生した時に冷静に判断できる者はいない。ただし、事前に逃げる場所や経路を決めておくことはできる。どこに、どのように逃げるのか決めて、そして、訓練で経験を積むことにより災害時の避難行動につながる。地震警報システムや避難マニュアルが命を救ってくれる訳ではない。
- ・防災教育を進める上で、恐怖をあおるような教育はダメ。防災教育の先には恐怖ではなく希望やハッピーエンドがあるべきである。



## 訪問先：宮城県石巻市立河北中学校

大阪教育大学学校安全推進センターが主催する「セーフティプロモーションスクール（SPS）」として令和3年2月に認証を受け、学校安全の推進体制を構築している学校である。



### ○防災主任 三浦 勇佑 氏

#### (1) 地域と連携した組織的活動の展開

##### ①「河北中学校区地域防災連絡会」の設置（年3回実施）

- ・学校と保護者、地域住民等と連携した地域ぐるみの防災活動の充実を図る。
- ・石巻市総合防災訓練による地域住民との災害時の対応を確認
- ・災害時の避難所運営

##### ②河北地区防災会議（年3回実施）

- ・安全担当主幹教諭を中心とした河北地区の学校生活・防災体制等の確認
- ・河北地区の幼・保・小・中学校一斉引渡し訓練の実施について検討

#### (2) 避難訓練の計画

- ・様々な災害を想定した訓練を年8回実施している。  
災害の種類・・・地震・津波、火災、原子力災害、不審者対応  
発生時間帯・・・休み時間、清掃中、部活動中、予告なし
- ・職員の役割分担は明記せずに臨機応変に動く訓練を実施している。年度初めに「役割分担はしない」ことを共通理解する。ただし、司令塔は決めておく（例えば、校長が不在の場合は教頭、校長・教頭がいない場合は〇〇のように）。司令塔を誰でもできるようにすることで責任感が生まれ、人任せにしないようになる。
- ・部活動中の避難訓練では、教職員が会議で不在という想定で実施し、部長を中心に避難する。部長を中心に事前と事後のミーティングを実施して、生徒同士による話合いの場を設定している。

**訪問先：宮城県気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館**

旧気仙沼向洋高校校舎。将来にわたり震災の記憶と教訓を伝え、警鐘を鳴らし続ける「目に見える証」として活用し、気仙沼市が目指す「津波死ゼロのまちづくり」に寄与することを目的に震災遺構として保存されている。

◇校舎内部



◇校舎外部





7月30日(金)

訪問先：岩手県陸前高田市 東日本大震災津波伝承館

「奇跡の一本松」で知られる高田松原津波復興祈念公園内にあり、東日本大震災の事実と教訓を世界中の人々と共有し、自然災害に強い社会を一緒に実現することを目指し建てられた施設である。



## 訪問先：陸前高田市立高田小学校

### ○校長 金野 美恵子 氏

- ・「いわての復興教育」が本格的にスタートして2年目。「つながる つなげる 高田学」をテーマに、地域の人や文化、産業、歴史、自然を学び、ふるさとの未来を考える活動を展開している。
- ・子どもたちの中には身内を亡くした子もいたため、震災後は心のケアの面から震災の話を遠ざけていたが、このままではいけないと思い、昨年度から防災教育に取り組むこととした。
- ・保護者の中には、未だに震災のことを拒絶する人もいるが、防災教育を通して学んだことを子どもから保護者に伝えるようにしている。
- ・防災教育に取り組むようになってから、家族や友達を大切に思う気持ちが育っている。
- ・参観日に合わせて、防災に関する授業を行っている。
- ・震災後に生まれた子どもたちには、震災を体験した方から直接話を聞くことも大事だと思っている。





訪問先：陸前高田市立高田第一中学校

○教諭 高橋 和恵 氏

- ・被害が大きかった地域であるが故に、震災後5年間は心のケアを重視した。
- ・「被災地だからこそ防災を充実させたい」という思いから、防災教育プロジェクト「つなぐプロジェクト」が5年前から本格的にスタートした。
- ・「いわての復興教育」の指針を受けた3年間を見通した防災教育として、「知る」(1年)→「深める」(2年)→「つなぐ」(3年)をテーマに実施。
- ・生徒の興味・関心を高めるため、生徒からの公募で防災キャラクター「まもるくん」(右図)を考案。マグネットや反射材などのグッズを制作した。



生徒の公募によって決まった防災キャラクター  
まもるくん

- ・高田第一中学校独自の防災学習ノート「まもるくんノート」(右写真)を作成し、防災教育の水準の維持につなげている。
- ・教職員の防災意識の向上  
生徒の命を最優先に教職員の防災意識を高める。  
人事異動により教職員の入替えがあっても防災教育の水準を落とさないように、年度初めに防災教育計画を確認している。



まもるくんノート

◆様々な防災体験学習を实践

「サバイバル飯（サバ飯）」

空き缶2つと牛乳パックでご飯を炊く。

「避難所運営ゲーム（HUG）」

1年生は基本、2・3年生はより実践的な内容で実施。

「マイタイムライン・防災マップの作成」

夏休みに自分の家のハザードを調査し、それを基にマイタイムラインを作成。自分の住む地域や通学路の状況を把握し、緊急時の避難について考えた。

「防災マップを歩こう」

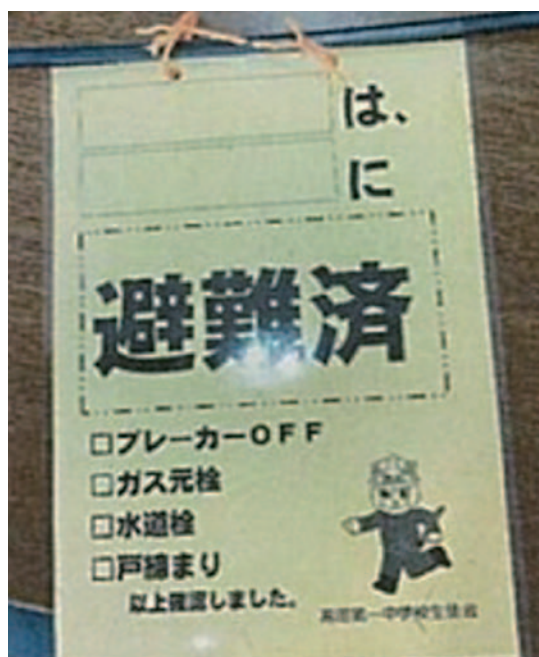
実際に避難経路を確認するとともに、逃げるだけでなく、助ける側としても課題を見つける。

「まもるくんの日」（月命日の11日）

教室での座学だけではなく、生徒会が主催する伝言ゲームなどにより、情報を正しく伝えることの難しさを体験するなどの取組を実施。

「安否札の制作・配布」（下写真）

避難状況を提示して避難することにより、安否確認を早くすることができる。全校で制作して、夏休み中に地域に配布。生徒のコミュニケーション能力の育成と地域コミュニティの形成を目指している。



配布した安否札

## 2 令和4年度

日程 令和4年7月25日（月）～7月27日（水）

7月25日（月）

訪問先：岩手県盛岡市立下橋中学校

盛岡市立下橋中学校・同市立桜城小学校・同市立杜陵小学校では、令和3年度から「いわての復興教育スクール」の指定を受け、小・中学校が連携しながら、地域と協力した防災教育の研究を行っている。

### （1）地域の概要

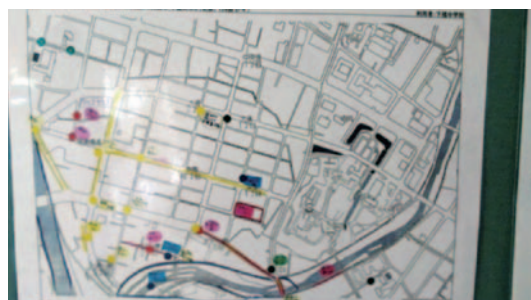
盛岡市中心地に位置し、学区内には盛岡駅、菜園繁華街、官公庁を有する。校舎は、中津川沿いに立地し北上川も近く、近年の気象災害の状況を鑑みると水害への対策が必要な地域である。

### （2）防災教育の取組

下橋中学校・桜城小学校・杜陵小学校の3校が連携した取組

#### ①地区調査活動 2021 in 下橋

この取組は、「小・中学校が連携し、地域清掃や自分が住む地域の安全マップ作りを通して防災や安全に対する意識を高め、地域に誇りを持つこと」を目的に実施。既存の地区清掃活動に併せて、地域の危険箇所を確認しながら下橋中学校までの道のりを歩いた。下橋中学校集合後に行われた全体会では、自衛隊岩手地方協力本部による防災講演会を開催し、ハザードマップの見方について確認した。その後、小中学生が各地区に分かれて安全マップを作成した。



地域安全マップ

#### ②卒業した小学校での発表会

中学1年生が水害について学習した内容を自分が卒業した小学校で発表。水害から命を守るために大事なことを学び、発信することにより、災害時の行動や備えについて深く考えることができた。



3年生が作成した「いわての教え いきる・かかわる・そなえる」マークデザイン（ピクトグラム）



7月26日(火)

訪問先：東北大学災害科学国際研究所



### ○講演1 「地域防災の取組と学校との連携」～災害に備えて～

仙台市地域防災リーダー（福住町町内会 防災・減災部長）大内 幸子 氏

- ・日本一災害に強い町内会を目指す！  
できるだけ行政に頼らない地域力  
→災害が大規模なほど公助には限界がある。
- ・災害時には女性の視点に立った防災が必要！  
→女性は子育てや介護などの実生活に根差した知識や経験が多い。
- ・学校の防災教育と地域防災のタイアップが、地域の発展・地域防災力向上につながる！  
→地道な活動だが、継続していれば災害時に必ず役に立つ。



### ○講演2 「地域との協働による防災教育 —避難訓練評価を中心に—」

宮城教育大学教育学部 講師 林田 由那 氏

- ・避難訓練のポイント
  - ① マニュアルのどの部分を確認するための訓練なのか明確にする。
  - ② 学校の立地や実情に即した緻密な災害想定をする。（災害の種類、規模、管理職不在などの不測の事態）
  - ③ 子どもの主体性を発揮できる訓練とする。（既存の知識の活用、自分で判断）
  - ④ 訓練の評価を行う。（教職員と児童生徒の気づきや意見も反映する。）
  - ⑤ 明らかになった課題に対処する。（専門家の指導・助言を得る。）



# 「避難訓練チェックリスト」

学校で実施される避難訓練を第三者に参観・評価してもらう際に使用するもの。評価者としては、保護者、地域住民、警察・消防、自治体関係者、大学教員などが考えられる。また、校内での自己評価として教職員、児童生徒の代表者を評価者として行うことができる。

### 先生方へ

この避難訓練チェックリストは、各学校の避難訓練を評価してもらう際に使用します。「評価者」は、保護者・地域住民・他校の安全担当主幹教諭等と考えられます。多様な視点から避難訓練を参観・評価してもらうことで、多角的な観点に基づき評価することができます。児童生徒等・教職員の関わりに加え、それぞれの気づきを各学校のマニュアル等の見直し・改善に際していきましょう。

**避難訓練のポイントを**

危険管理マニュアル、学校安全計画等の見直しに際しては、

- 見直しになった項目に対応する。
- 避難訓練の計画・実施を評価する。
- 学校の立地条件、実情に即した継続的な改善を要する。
- 児童生徒等の安全および、教職員自らの安全も確保しながら、危険管理マニュアル等に即した適切な対応を要している。
- 子どもの実態等を踏まえて、継続的に改善する。
- 学校の立地条件、実情に即した継続的な改善を要する。
- 児童生徒等の安全および、教職員自らの安全も確保しながら、危険管理マニュアル等に即した適切な対応を要している。
- 子どもの実態等を踏まえて、継続的に改善する。

**避難訓練チェックリストにおける評価の視点 (目指す姿)**

**児童生徒等**

- 初期対応、二次対応に関し、自らの安全の状況を適切に判断し、自らの生命の尊厳を基礎として、主体的に行動している。

**教職員**

- 防災教育 児童生徒等が防災教育で身につけた力を発揮し、安全な行動を尊厳・判断し、主体的に行動できるよう働きかけている。
- 防災管理 児童生徒等の安全および、教職員自らの安全も確保しながら、危険管理マニュアル等に即した適切な対応を要している。
- 組織活動 すべての教職員が、各人の役割をまね、一丸となって避難訓練に取り組んでいる。
- 地域・住民・関係機関等と、目標を共有し、円滑に協働している。

◎ 文部科学省「学校の危険管理マニュアル作成の手引」(平成30年2月) 危険管理マニュアル作成・見直しの参照例をもとに作成 ※ 令和4年度避難訓練パッケージ作成委員会(PDCAサイクルをいかにした避難訓練(地震・津波・火災))も参考にしてください。

■ みやぎ避難訓練指導パッケージ作成委員会

佐田由那 東北大学大学院防災教育研究科准教授(作成代表)  
佐藤 健 東北大学理学部国文学科教授  
戸田芳雄 日本安全学会理事長/明海大学教員

協力 宮城県保健体育安全課  
石巻市教育委員会学校安全推進課

＜付記＞  
本資料は、東北大学災害科学国際研究所リソースを活用した共同研究活動、日本安全学会特別研究、研究費(20K13985)の助成を受けて、実施いたしました。  
学校における避難訓練評価の目的以外での、無断での複製・転載・転用等は、固くお断りいたします。  
お問い合わせは、みやぎ避難訓練指導パッケージ作成委員会(国立大学法人宮城教育大学防災教育研究科組織内の22-216-3296)までお願いいたします。

2022年3月(第2版)

## PDCAサイクルをいかした 避難訓練 チェック リスト

地震・火災  
災害等対応

### 家庭・地域とともに みやぎ避難訓練指導パッケージ作成委員会

#### 今回の避難訓練の概要

訓練種別	<input type="checkbox"/> 地震 <input type="checkbox"/> 火災 <input type="checkbox"/> 地震+火災 <input type="checkbox"/> その他に想定する二次災害等
学校・学年	実施日時
災害想定	
目標	
場面	<input type="checkbox"/> 授業中 <input type="checkbox"/> 休み時間 <input type="checkbox"/> 部活動・放課後 <input type="checkbox"/> 登下校 <input type="checkbox"/> 学校行事 <input type="checkbox"/> その他( )
一次避難	<input type="checkbox"/> 普通教室 <input type="checkbox"/> 特別教室 <input type="checkbox"/> 体育館 <input type="checkbox"/> 校庭 <input type="checkbox"/> その他( )
二次避難	<input type="checkbox"/> 校庭 <input type="checkbox"/> 校舎(隣接校舎の隣) <input type="checkbox"/> その他( )
三次避難	<input type="checkbox"/> 校外( ) <input type="checkbox"/> その他( )
管理職等が不在の想定をしていますか。	
想定していない・想定している(不在と想定する教職員名:	
児童生徒等は、これから避難訓練が実施されることを知っていますか。	
日時を知っている・日付のみ知っている・知らない	
自校の教職員・児童生徒等以外に、今回の避難訓練に参加する方(保護者・地域住民等)はいますか。	
いない・はい( )	
その他、不測の事態や特別な状況等を想定している場合は、ご記入ください。	
( )	

※ 校内の状況・災害状況が想定できない、危険な・不安な要素の発生、訓練器材の確保、緊急地震速報機能等の使用、教職員一部が不在で実施する部分がある等

## 学校の避難訓練チェックリスト

このチェックリストは、避難訓練・危険管理マニュアル等の見直し・改善のための参考とさせていただきます。ご記入後、各学校の担当の先生にお渡しください。ご協力をお願いいたします。

**評価者の皆様へ**

自校の保護者・地域住民等  
 保護者  地域住民  コミュニティスクール委員  
 その他( )  
 他校/学校外の防災関係者等  
 安全担当主幹教諭  防災主任  指導主事  
 警察・消防関係者  研究者  その他( )  
 校内での自己評価  
 校長  教頭  主幹教諭  教務主任  
 防災主任  児童生徒等  その他( )

氏名 (任意)

もっと頑張っ！ 頑張らないよ！ 他校にも発信したい！

全項目に改善すべき 改善すべき 標準的 優れている 大いに優れている

**児童生徒等の取組**

キーワード	チェック項目	評価
① 的確な初期対応	発進段階に応じて、自らの命を守るための初期対応を自発的にとることができる。 【留意】物が落ちてこない・倒れてこない・移動してこない・場所を自分で探し、避難指示が聞こえない場合に、落ち着いて校内放送や教職員の指示を聞ける状態をとっている。	10点満点中 点
② 的確な二次対応	「かーいも」に気をつけながら、発進段階に応じて、想定される二次被害等をふまえた避難行動をとることができる。 【留意】窓ガラスや落下・転倒の危険性のあるものを避け、扉を閉めたりが避難している。 【留意】鼻や口をハンカチや衣服等で覆いながら、姿勢を低くして避難している。	10点満点中 点
③ 積極的な参加	真剣な態度で、状況に応じて他の児童生徒等と協力(手をたたく・声かけ・助け合い等)するなど、すすんで参加している。	10点満点中 点
④ 指示の聞き方	教職員からの指示があった場合、落ち着いてその指示を聞くことができる。	10点満点中 点

所見(児童生徒等の取組)

スマホ・タブレットでも  
評価・所見が  
入力できます

QRコード

## 教職員＜防災教育＞の取組

キーワード	チェック項目	評価
① 臨場感ある声かけ・雰囲気づくり	児童生徒等が自分ごととして避難訓練に向き合うよう、臨場感や緊迫感のある声かけや雰囲気づくりをしている。	10点満点中 点
② 安心させられるような声かけ	児童生徒等を安心させられるような声かけをしている。	10点満点中 点
③ 的確な指示	避難行動や避難経路について、児童生徒等に明確な指示を行っている。	10点満点中 点
④ 創意工夫	児童生徒等が、自ら判断し、行動することができるような場面を設定するなど創意工夫をした避難訓練を実施している。	10点満点中 点

## 教職員＜防災管理＞の取組

キーワード	チェック項目	評価
⑤ 安全な避難行動	児童生徒等の安全および教職員自らの安全も確保しながら、避難行動を行っている。	10点満点中 点
⑥ 本部の設置	管理職等が迅速に集合し、校内外対策本部(課を設けるなどして必ず「かまぼこ」を立ち上げ、校長等を中心に、とるべき行動の協議・決定をしている。	10点満点中 点
⑦ 情報の入手・整理	避難行動の検点・計測に有効な情報を、積極的に入手・整理している。 【留意】ラジオ、防災無線、タブレット、その他の情報ツール。 【留意】校舎・校庭の巡回。 【留意】第一報警報による火災の程度・場所等の正確な情報。 初期消火の可否や状況、校舎・校庭の巡回、風向き等	10点満点中 点
⑧ 非常持ち出し袋	必要な物資を揃えた非常持ち出し袋を、避難の際に担当者が持ち出している。	10点満点中 点
⑨ 避難経路の確認・周知	避難経路及び校舎・学校周辺の状況の確認を迅速に行い、使用可能な避難経路を教職員・児童生徒等に周知している。	10点満点中 点
⑩ 児童生徒等の安全確認	児童生徒等の検点(校内を巡回し、残留者の有無を確認)、安全確認、点呼を、迅速かつ的確に行っている。	10点満点中 点
⑪ 不測の事態への対応	関係者・安全不明な、その他のラブラフが生じた場合(そのような想定を含めることが望ましい)、状況に応じて柔軟に対応している。	10点満点中 点

## 教職員＜組織活動＞の取組

キーワード	チェック項目	評価
⑫ 各自の役割の遂行	教職員一人ひとりが、各自の役割を認識し、着実に遂行している。	10点満点中 点
⑬ 教職員同士の協力	教職員同士が声をかけ合うことで協力し避難訓練に臨んでいる。	10点満点中 点
⑭ 家庭地域等との協働の意思	家庭・地域、関係機関、近隣の学校等との連絡体制(方法・タイミング・担当等)の確認・シミュレーションを、丁寧に行っている。	10点満点中 点
⑮ 家庭地域等との実際の協働	家庭・地域、関係機関、近隣の学校等と、実際に円滑に協働して避難訓練を実施している。	10点満点中 点

所見(教職員の取組)

### ○講演3 「学校の災害安全の推進に向けて」

東北大学災害科学国際研究所 防災教育実践学分野 教授 佐藤 健 氏

#### ◇ 地域と連携した防災教育を進めるために重要なポイントについて

- 地域防災リーダー自身が地元のことを『好き』でなければ成り立たない。
- 地元から『顔の見える』地域防災リーダーは、学校からの信頼を得られやすい。

※仙台市地域防災リーダー SBL：大内幸子さんの場合

- ・町内会役員として地域の夏祭りの運営の中心
- ・小学校の校長先生が新しく着任する度に災害履歴や地域特性をレクチャー
- ・仙台市立高砂小学校の避難所運営委員会の中心的役割
- ・学校評議員、スーパーバイザー、子ども見守り、感染症対策の消毒作業などの協力



#### ◇ 持続可能な取組とするために重要なポイントについて

- 活動しながら常に“種”を蒔き続ける（次世代の地域人材を育む）ことが重要
  - ・多様な主体が主体的に活動すること
  - ・大人と子どもと一緒に活動すること
  - ・学校と地域と一緒に活動すること

#### ◇ 学校において科学的な手法やアプローチを用いて防災教育を実施する際のポイント

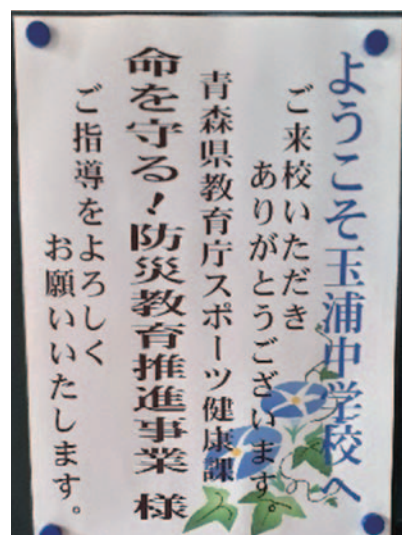
- 地域の教育力を発揮すること、地域の教育力を活かすことが重要
- “専門家の専門性に基づく守備範囲”を踏まえた上で上手に支援を受けること



## 訪問先：宮城県岩沼市立玉浦中学校

(東日本大震災発生時の様子)

東日本大震災当日、午前中に卒業式を行い、1・2年生は12時過ぎに下校したため、各家庭で地震に遭う。3年生は保護者とともに卒業を祝う会を行っている中で地震が発生した。避難してきた地域の方々とともに校舎3階へ垂直避難した。校舎の浸水は玄関の高さまでに及ぶ。その後、避難所を開設したが、すぐには行政の支援は届かなかったため、教職員と生徒で避難所運営を行い、中学生がボランティアとして活躍した。



### ○岩沼市立玉浦小学校 安全担当主幹教諭 武田先生

東日本大震災の津波により校舎の1階が浸水し、駐車場では自動車の火災も発生した。その中でも、震災の約1か月後には学校が再開するなど、玉浦地区は比較的復興が早かったとされる。その背景には、地域住民の支えと、市内の他の小・中学校からの支援があった。

自助・共助の取組が教訓となって、今の地域主体の防災訓練に繋がっている。玉浦小学校では、5分程度で終了するものを含め年間18回の避難訓練を実施しており、あらゆる状況を想定し、児童だけでなく教職員もいざという時に対応できる力を身に付けさせている。

防災教育としては、県の副読本や青少年赤十字プログラム冊子『まもるいのち ひろめるぼうさい』を活用しているほか、地域住民から実際に被災した当時の話を聞く活動を行っている。

このほか、岩沼市の総合防災訓練に児童や教職員がそれぞれ参加し、避難所運営などを学んでいる。また、玉浦小・中学校に1名ずつ配置されている安全担当主幹教諭が「防災だより」を作成して地域住民に配布している。



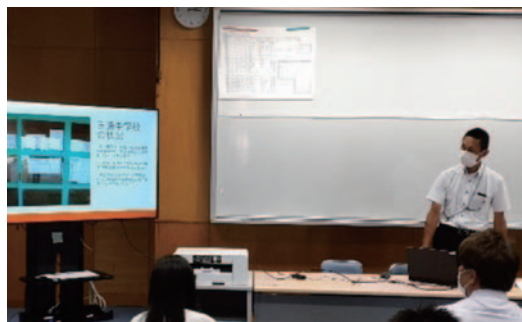
校舎屋上からの風景（奥が太平洋）

### ○岩沼市立玉浦中学校 安全担当主幹教諭 樋口先生

個人の防災力の向上を目標に掲げ、1年次は自分の住んでいる地域を見直し、2年次は周囲の人々を助けるための知識・技能の習得、3年次には実際に自分たちがどのように地域に貢献できるのか学習する。毎年7月に小・中学校合同の避難訓練を実施しており、中学生が自ら進んで小学生をサポートしながら訓練に臨む。

市の備蓄品（食料、簡易トイレ、発電機など）については、実際の災害時に混乱が生じないように、あらかじめ避難所の部屋割を明示しておくなど、事前準備を工夫している。

地域住民の防災意識も高いことから、今後さらに防災に関する取組について、内容や対象範囲を拡大して継続的に取り組んでいきたい。



### ○岩沼市総務部防災課 安齋課長

岩沼市では、災害対応に備えたネットワーク作りが重要であると考え、総合防災訓練やその事前ミーティングなどを通じて「顔が見える関係づくり」に主眼を置いて取り組んでいる。

また、防災部局担当職員が児童生徒を対象にした防災に関する講座を開いたり、学校の危機管理マニュアルの見直しに協力するなど、学校との連携を重要視している。地域の防災力向上のためには、学校と行政の連携は不可欠である。

どの市町村においても、学校から防災部局に依頼があれば、喜んで協力するだろうから、学校からもぜひ積極的に連携を図ってほしい。





7月27日（水）

訪問先：宮城県伊具郡丸森町 旧金山小学校

○株式会社GM7 伊藤 淳 氏

○丸森町立丸森小学校 渡邊 知子 教頭

金山地区は、昔から地域住民が学校に対して非常に協力的で、地域全体で子どもたちを育てるという意識が強かった。被災直後も地域住民が率先して学校の片付けをしてくれた。

一方で、被災により児童には精神的ストレスがかかっていたため、心のケアに気を付けた。「当たり前のこと＝日常生活」をいかに送ることができるか、教職員や保護者、地域住民が児童を見守り、いかに安心感を与えるかが大切だった。安心して日常を送ることができる環境、そして、実際に何かを「達成した・できた」という経験を繰り返すことによって、児童に自信と自己有用感を感じさせ、徐々に児童の心も安定していった。

また、児童には自分のことを大切にすることと同時に、他人も大切にすることを身に付けさせるように指導した。地域住民に対し常に感謝を忘れないことを児童に教え、それに伴い地域住民も「自分たちが子どもを守らなくては」と考えるようになり、結果として、何かあった際にも協力できる関係が構築された。普段から信頼関係を築いておくことが大事である。



旧金山小学校脇を流れる雉子尾川  
令和元年台風19号で越水氾濫した。



